

私のはんせい記

～「改修設計」事始め～

建築家 三木 哲

● 屋外環境整備事業 その10

深川のメタセコイアの森を育てる

深川に都内有数の「メタセコイアの森」がある。

樹齢50年のメタセコイアが40本近く整然と並び四季折々、美しい景観をつくる。

幹は直立し端正な円錐形で均整がとれ、樹高は30～35m、直径1.5～2mになる。

葉は細長く、新緑は美しく、秋に赤茶に紅葉し落葉する。雌雄同株で、花は2～3月に咲き、円錐花序となって枝から垂れ下る。結実が多く、秋から冬にかけて無数の種が地表に落ちる。

「メタセコイア」の化石は日本各地の新生代第三紀層(6430万年前～260万年前迄)に見られ、カナダ北部・シベリア・グリーンランドなど北半球の北極周辺に広く分布していた。

1939年に日本の関西地方の第三紀層で、常緑種の「セコイア」に似た落葉種の植物遺体(化石の1種)が発見された。発見した植物学者・三木茂により、「メタセコイア」と命名された。

当初、「化石」として発見されたため絶滅した種とされていたが、1945年に中国四川省、磨刀溪村(現在の湖北省利川市)の「水杉(スイサン)」と同種とされ、現存することが確認された。このため「生きている化石」と呼ばれることも多い。

私とこの森との関わりは1993年から始まる。

14棟、777戸の高層団地の中心部にあるこの森は、第1回目の大規模修繕工事の時には、そっと保存されていた。ところが、2006年から始まる第2回目の大規模修繕工事では、放置するわけにはいなくなっていた。

メタセコイアは成長し、樹高は7階(約20m)に達し、その幹はツリーサークルからはみ出しそうなほど太くなっていた。

根元は1.5m角の井桁状ツリーサークルの中心に植えられ、鋼製アングル枠に擬石製ブロックを乗せ、幹が通る開口寸法は65cm角で、この鋼製アングルが幹に食い込み締め付けていた。

建設当初、樹齢は10年前後、樹高10m程のこの木の幹は細く、ツリーサークルが根回りを保護し、強風などで転倒しないように支え、開口寸法に余裕があった。が、成長が早いこの木は根廻りの幹の径が1m近くに達し、



インターロッキングブロック舗装の中に植えられたメタセコイアの樹林の2006年の写真。井桁状ツリーサークルが幹を締め付けていた。

ツリーサークルの開口より太くなり、鋼製アングルが幹の外周部に食い込む状態となっていた。

幹は年輪を増し樹皮を外周に広げ成長を続ける。団地竣工後25年で20m程の高さに成長したが、今後も成長を続け、幹の太さは直径1.5～2m位まで成長を続ける。

65cm角の鋼製アングル枠の井桁状ツリーサークルで根元を締め付ければ、やがてこの木は壊死し、倒壊しかねない。

そこで井桁状ツリーサークルを全て除去し、1.5m角の縁石を残し、中にタマリユを密植した。

団地にはメタセコイアを中心に、栃、楠、樺、コリノキ、染井吉野などの高木が各所に多数植えられていた。

高木の配置が適切なため、剪定は行わず自然の成長に任せる植栽管理がなされていた。

だが、高木の樹根が成長し、路盤を押し上げる被害が発生していた。

舗装路盤やL型街渠、木柵やフェンス、ベンチなど浅い基礎で支えられた工作物が持上がり、傾斜、変形して壊れ、段差や水溜まりを発生させていた。

広範囲で屋外環境整備が必要となり、インターロッキング舗装やアスファルト舗装面、L字型街渠・縁石等を剥して整地し、路盤等を持ち上げている樹根を処理し、転圧・再舗装して段差を解消しバリアフリー化した。

傾斜・変形した街渠・縁石、柵やフェンスなどの外構工作物を造り直した。

管理組合は江東区「まちなみ景観賞」を受賞した。この団地・建物が今後30～50年と経過する頃、この地に巨木の森林ができていると期待している。

みき・てつ

(有)共同設計・五月社一級建築士事務所顧問。1943年生まれ。

URD・建築再生総合設計協同組合・管理建築士。

建築家がメンテナンスを手がけることなど考えられなかった時代から「改修」に携わり、30年以上にわたって同分野を開拓し続けてきたバイオニア。